

年間第九主日

2011. 3. 6

マタイ 7・21-27

今週の水曜日、3月9日は灰の水曜日です。お知らせにもありますように、当日は朝6時半と10時、それに夜7時半にミサと灰の式が行われます。御都合をつけて御参加ください。

今日は、降誕節と四旬節の間に挟まれた、これまでの年間の季節の区切りとなる年間第九の主日です。今年、今までの年間の主日毎に山上の説教のみことばに耳を傾けてきました。今聴いた福音はその山上の説教の最後のみことばです。

「わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。」この今日の福音の最初のみことば、主の御名によって祈りをささげようと、ここに集っている私たちをたじろがせませす。私たちの誰が、自分は天の父の御心を申し分なく行っていると自信をもって言い切ることが出来るのでしょうか。そのような私たちには、主の御名によって祈ることはゆるされないということなのでしょう。天の父の御心を行う者だけが天の国に入ることが出来るのであって、「主よ、主よ」と主の助けを求めて祈る者たちが、必ずしも皆、天の国に入ることが出来るわけではないとすれば、私たちの祈りは一体何の役に立つと言うことになるのでしょうか。けれども、心を落ち着けて、思いめぐらすなら、イエスさまは祈りに意味がないと言おうとしておられるのではないことが分かってきます。

「あなたたちが、『主よ、主よ』と言って、わたしに何かを願い求めようとしているとき、わたしに何を願い求めているのか、よく考えて見なさい」とイエスさまは言われているのです。確かにイエスさまは「主よ、主よ」という私たちの願いに答えてくださることもあります。けれども、私たちがいくら「主よ、主よ」と願い求めても、答えてくださらないことのあることも私たちは知っています。そのような時、私たちは今日のイエスさまのみことばを思い起こす必要があります。私たちの「主よ、主よ」という叫びに答えようとなさらない沈黙によって、イエスさまは私たちに何かを教えようとなさっておられるのです。そのような時、イエスさまが、私たちに何を教えようとしておられるかという答えの一つが、今日のイエスさまのみことばに示されています。「あなたはいつも、聞きとどけてもらいたい自分の願いを持って、わたしのところに来て『主よ、主よ』と言っているけれども、天の父の御心を行うことのほうが大切なのだ。天の父の御心を行う者だけが、天の国に入れることができるのだから。」とイエスさまは言っておられるのです。「あなたは自分の願いが聞きとどけられることと、天の国に入ることとどっちが善いと思うか」とイエスさまは私たちに尋ねておられるのです。そのよ

うなイエスさまのみことばを聴く時、私たちはどのような態度を取っているのでしょうか。イエスさまにそのように言われても、なお、聴きとどけてもらえない願いを訴え続けることも出来ます。そして、イエスさまはそれもよしとさせていただきますのです。山上の説教の他の箇所では、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」とも言ってくださっています。そのようにして、願うことを求め続け、答えを探し続け、開かれることを願って、たたき続けることが必要なのです。応えてはくださらない、聴きとどけてくださろうとなさらない、イエスさまのもとから離れないことが大切なのです。そうして、私たちが求め続け、探し続け、たたき続けることに疲れ、崩れ落ちそうになったとき、イエスさまの今日のみことばを思い出すことが出来たらと思います。そうすることが出来たら、求め続けることに疲れ果てた、私たちの側に、十字架の道行きを歩まれるイエスさまが、そっと近寄ってくださり、今日のみことばをそっとささやきかけてくださるかもしれません。

厳しい裁きのことばにしか聞こえなかった、今日の福音のみことばが、その時、イエスさまの全てのみことばと同じ響きを持っていたことに私たちは気付かせていただくのです。福音書に書き記されたイエスさまの全てのみことばは、御自分のもとに私たちが招き寄せようとしていてくださる、私たちへの愛による招きのみことばです。

「わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。」。イエスさまにも父なる神さまに聴いていただきたい願いごとが山ほどあったことでしょう。確かに、父である神さまはイエスさまの願いに応じて、悪霊や病に苦しめられている多くの人々を救ってくださいました。けれども、イエスさまが一番聴きとどけてもらいたいと願っておられたにちがいないことは、ついに、そのご存命中には聴かれることはなかったのです。イエスさまが一番願い求めておられたこととは、全ての人々がイエスさまの福音を受け入れて、イエスさまが招き入れようとされた天の国の幸せに入ることだったにちがいないのです。そのためにイエスさまは私たちと同じ一人の人間となって、私たちの中に来てくださったからです。けれども、罪によって、神さまから離れ去った人間が作り上げたこの社会の中では、イエスさまの福音の招きは、そのままでは人々の心に通じることはなかったのです。それでも、イエスさまを遣わされた、人々を御自分の国、天の国に招きいれようとされる天の父である神さまの御心は変わることがないのです。その天の父の御心を、自分の全てをささげて私たちのこの世界に実現するために、イエスさまは十字架につけられて、そのいのちをささげられたのです。これが、この人の世で天の父の御心を行う、最後に残された唯一の道だと受けとめられて、イ

イエスは十字架への道を歩み通されたのです。イエスは、御自分が歩まれた、その十字架の道を指し示しながら、あなたが、天の国を味わいたければ、わたしに従ってこの十字架の道を歩みなさいと言ってくださいなのです。

主よ、主よと叫んでも、聴いてもらえない苦しみの中から、私たちを招いておられる十字架のイエスさまに目を上げることができるなら、私たちの歩む苦しみに満ちた十字架の道が、イエスさまの歩まれた、天の父の御心を行うためのイエスさまの十字架の道につながっていることに気付くことでしょうか。そのように、叫んでも聴きとどけてもらえない私たちの背負わされている苦しみを、私たちの十字架として、私たちの天の父の御心として受け止めることができる時、私たちは天の国の近くにまでたどりつけているのです。

たとえ、十字架の苦しみのさ中であっても、イエスさまがそこにいてくださり、そのイエスさまとともに、天の父である神さまを仰ぎ見ることができるとき、そこに、私たちが入るべき天の国が開かれていることを私たちは知ることが出来るのです。

そのようなイエスさまへの、裏切られることのない信仰を土台にして、そこを住まいとして、私たちの信仰生活を生きていきたいと思えます。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高